

4. シイタケ流通機構の近代化

九州大学農学部 吉 良 今朝芳

生産されたシイタケの94.8%は市場に出荷され商品化されている。したがって、その流通市場がどのようになっているかの分析は、生産構造の分析と同様にきわめて重要なことである。ことにシイタケの商品的特性と生産者の多様性から、流通市場も画一的でなく、主産地の社会的、経済的条件の違いを背景に特徴的な市場が形成され発展した。

ところが、近年は需給構造の変化から流通段階においても各種の問題が発生してきている。したがって以下では、乾シイタケを中心にまず流通経路と価格形成の特徴を明らかにし、ついで、内需外需別の実態分析をおこなった。また最後にシイタケ流通の今後の方向について若干の考察を加えた。

1. シイタケの流通経路と価格形成

1) 流通経路：シイタケはだいたい図-1に示すような経路を経て、消費者まで配給される。ここで特徴的な点は、この流通経路が輸出向けと国内消費向けでは大きな相違がみられることである。

シイタケの流通を特徴づけるのは、第1に、生産の**零細性に対する消費の零細性**である。第2に、シイタケは、季節的な生産物で、**作柄に豊凶**があり、しかも鮮度が重視される。したがって近年は鮮度保持技術が向上してきており、これによつて需給のバランスが以前に比較してとりやすくなってきている。

しかしながら、実際には、**流通機構の複雑さ**、多様化にともなつて需給の不均衡、すなわち価格の変動が依然として激しい実情にある。このようなことから、産地では市況にもとづいて**長期および短期の出荷計画**

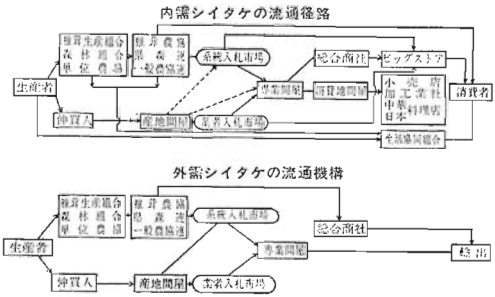


図-1 シイタケの流通機構

がたてられ、需給の調整がおこなわれている。ただし、このような努力にもかかわらず現実には取引の公正や価格変動の是正が適正におこなわれているとはいえず、今後の研究や施策の推進が必要である。

2) 集荷、販売機構：生産物の集荷、販売は、生産者にとって重要な問題である。とくに第1次産業の場合、畜産物や野菜などの例を引くまでもなく、系統出荷と商人系への出荷がそれぞれメリットを主張し、対立を続けている。シイタケについても同様である。ことにシイタケの場合は、林産物として位置づけられているため、森林組合がこれに一枚加わって、一般の農産物以上に複雑な様相を呈しているといえよう。ここで林野庁統計から、1974年の実態と過去5ヶ年間の動きについてみてみよう(表-1)。1974年のわが国のシイタケの集荷、販売量は11,625.6トンで、これは生産量の94.8%に相当する。

さて、この集荷、販売の比率を主体別にみるとまず、シイタケ専門農協(27.9%)と一般農協(29.2%)

表-1 シイタケ集荷、販売の推移

年次	集荷 販売量 トン	シイタケ 農協 %	一般農協		森林組合		商人系 集荷業者 %	個人 出荷 %	任意 組合地 %	計 %
			一般農協連	単位協	県、森、連	単位組				
1970	7,429.5	26.3	13.9	12.1	7.0	2.2	36.4	0.1	1.8	100
1971	8,705.2	26.6	17.2	9.9	7.6	3.4	33.1	0.6	1.6	100
1972	9,044.9	26.9	15.8	10.4	9.5	2.9	32.0	0.5	2.0	100
1973	8,517.0	23.2	16.5	10.4	9.5	2.9	35.7	1.2	0.6	100
1974	11,625.6	27.9	18.6	10.6	9.1	3.6	25.4	3.4	1.4	100

注) 林野庁林産課：特用林産物需給表(各年次)より作成

表-2 1974年ベスト10生産県の集荷販売割合

区分	生産量	集荷販売量	シイタケ農協	一般農協		森林組合		商人系業者	個人出荷	任意組合地
				一般農協連	単位農協	県森連	単位森組			
実数 (トン)	1 大分	2,998.2	2,903.9	2,226.6	11.0	83.6	134.0	—	448.7	—
	2 宮崎	2,213.0	2,171.0	—	988.0	74.0	—	11.0	1,029.0	69.0
	3 愛媛	1,034.0	1,016.5	10.0	84.4	62.3	644.3	79.3	119.4	5.8
	4 静岡県	993.3	951.7	126.0	130.0	240.0	—	3.0	428.0	—
	5 熊本	766.7	692.0	220.7	170.4	106.5	—	43.5	150.9	—
	6 高知県	479.0	466.0	—	96.0	199.0	43.0	89.0	30.0	9.0
	7 鹿児島	388.0	350.0	150.0	—	—	—	—	150.0	—
	8 島根	363.7	333.9	—	285.3	2.4	1.1	14.4	29.0	—
	9 長崎	318.1	290.5	45.0	—	98.5	—	60.0	56.8	28.2
	10 岡山	259.5	230.4	—	32.4	10.2	146.9	21.9	4.9	—
全国	12,261.6	11,625.6	3,249.3	2,168.4	1,237.1	1,052.5	414.3	2,956.3	390.5	157.2
構成比 %	1 大分	24.5	96.9	76.9	0.4	2.9	4.6	—	15.4	—
	2 宮崎	18.0	98.1	—	45.5	3.4	—	0.5	47.4	3.2
	3 愛媛	8.4	92.3	1.0	8.3	6.1	63.4	7.8	11.7	0.6
	4 静岡県	8.1	95.8	13.2	13.7	25.4	—	0.3	45.0	—
	5 熊本	6.3	90.3	31.9	24.6	15.4	—	6.3	21.8	—
	6 高知県	3.9	97.3	—	20.6	42.7	9.2	19.1	6.5	1.9
	7 鹿児島	3.2	90.5	42.9	—	—	—	—	42.9	14.2
	8 島根	3.0	91.8	—	85.5	0.7	0.3	4.3	8.7	—
	9 長崎	2.6	91.3	15.5	—	33.9	—	20.7	19.5	9.7
	10 岡山	2.1	88.8	—	14.0	4.4	63.8	9.5	2.1	—
全国	100.0	94.8	27.9	18.6	10.6	9.1	3.6	25.4	3.4	1.4

注) 林野庁林産課：昭和49年特用林産物需給表より作成

がほぼきっこうして、高い割合を占めている。ついで、商人系の25.4%であり、森林組合は12.7%とやや低い。しかし、安定した伸びをしていて注目される。

このようにシイタケ出荷、販売の主体はシイタケ専門農協、一般農協、森林組合、商人系となっているが、これらの主体の活動も、産地の成立過程の相違によって異っている。そこで、1974年ベスト10生産県について集荷、販売を主体別にみると表-2のごとくである。

全国平均でみると、さして他作物と違っていないのであるが、一步県段階にはいと、まるきり様相が違っている。すなわち全国第1位の主産地、大分県では、専門農協（OSK）が集荷率76.9%と圧倒的な比重を占めるが、一方宮崎県では県経済連が主体で45.5%の集荷率を示しているなど、その主体は全く違っているのである。これが他作物にない大きな特徴である。また、最近シイタケ主産地では、各種の生産者団体がシイタケ市場の開設を行い、同一地域内における系統間の集荷競争の激化がみられる。

3) シイタケの価格形成と手数料：最近の推移を九州主要シイタケ市場入札価格についてみると、図-2のとおりである。価格変動のすう勢は季節変動を伴いながら1962~65年まで上昇し、1966~67年

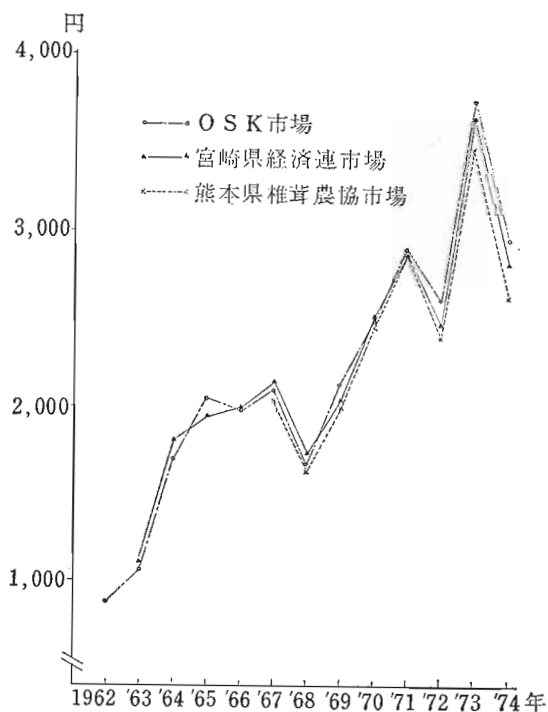


図-2 九州主要市場の年平均価格 (1kg当り) の推移

が停滞，1968年は前年対比で31%の増加という豊作で大きく下降した。しかし翌69～71年にはまた上昇し，72年には下落，73年に史上最高値1kg当り3,700円台を示したが，翌74年の春子の豊作から2,000円台と大幅に下落している。

さて，このような状況のもとで，シイタケの価格変動の統計的態様は，どのように理解されるであろうか。

まず季節変動については，つぎのようにいえよう。すなわちシイタケ価格は，春季から夏季にかけては緩

かな下降変動，秋季においては極めて激しい上昇変動を示し，冬季においては下降変動が読みとれる。しかも，その変動率はきわめて大きく，他産業と比較した場合，シイタケの価格変動が相対的に大きい商品であるといえよう（図-3）。

生産されたシイタケは，前述のとおり各種の流通経路を通じて消費者にとどけられるが，その場合の各段階における九州地方の標準的な手数料を調べてみるとつぎのとおりである。

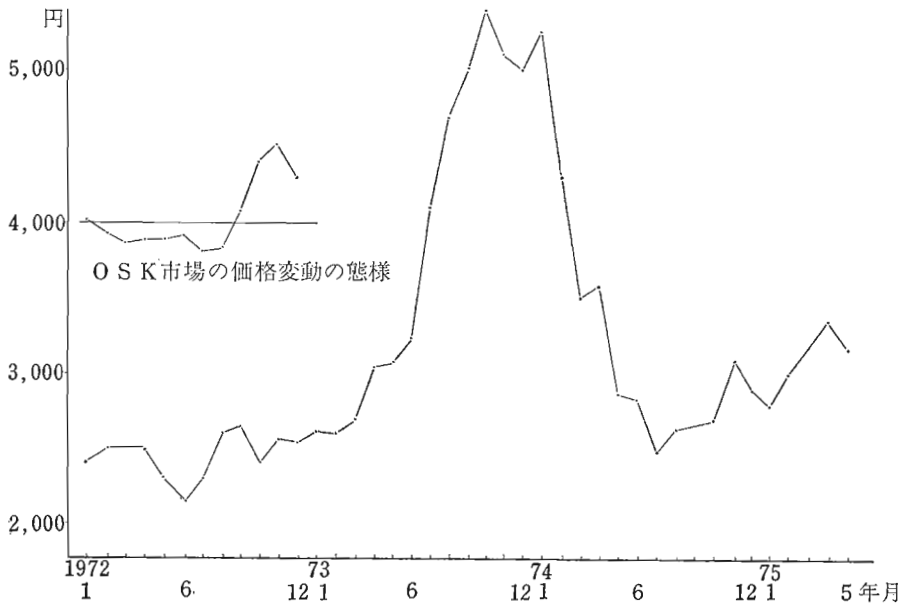
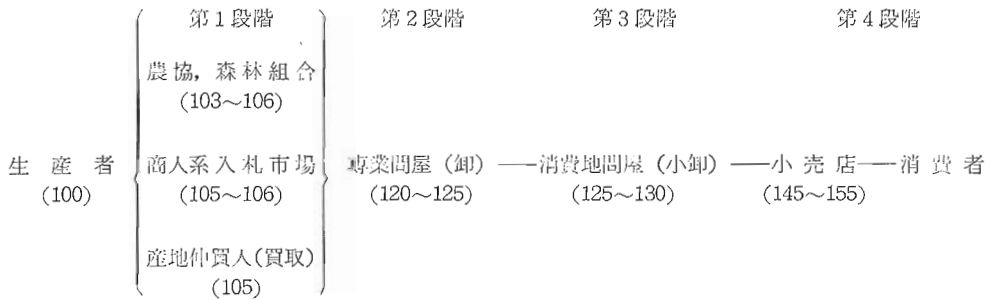
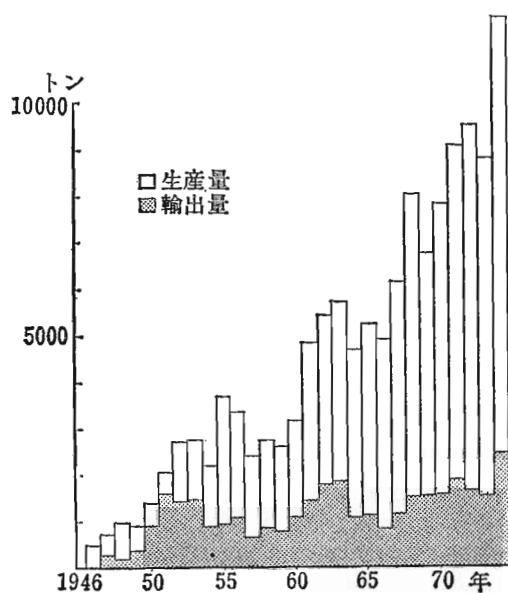


図-3 過去3カ年間の乾シイタケ月別価格変動(1kg当り)

2. 国内需要とその流通

シイタケは産地問屋段階および専業問屋段階で内需向けと外需向け（輸出）に大別されるが、両者の比率は近年大きく変化している（図一4）。すなわち、外需から内需優先への変化である。



図一4 シイタケの生産量と輸出量

国内需要は、消費の実態から家庭用と業務用に分類される。概念的には、家庭用にスライス・粉末等の一次加工を施したものを含み、業務用は料理店・各種給食に使用される外食用、加工用（佃煮・罐詰、センベイ、飲料水などの原料向けのもの）という名称で分類する。

ではいったいシイタケの家庭用、業務用の流通構造はどのようになっているのであろうか。一般にシイタケ部門では、流通とくに二次卸し、小売店および消費部門の実態をとらえた基礎的データがきわめて不備である。したがってここでは、家計調査、全国消費実態調査（総理府）、特殊林産物市況月報、特殊林産物需給表（林野庁）の諸統計を基礎に卸売業界、卸売市場、納入業者などの聞き取り調査を主な分析の論拠としている。

これらの諸資料によると現在のシイタケは家庭用65%、業務用35%と推定される。

1) 家庭用シイタケ

(1) シイタケの1世帯当り消費の動向：家庭用のシイタケ需要は最近嗜好食品から日常食品へと変質

し、一般家庭への普及によって使用が増加している。その実態は表一3のとおりである。

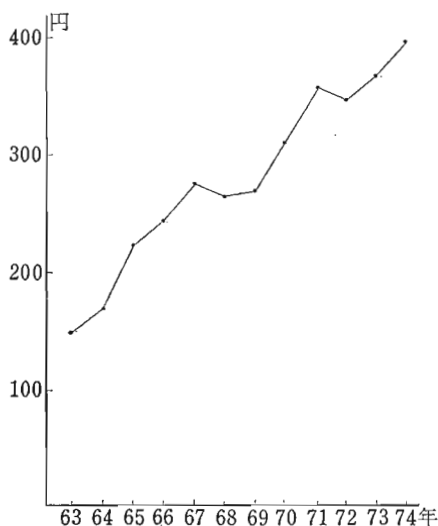
表一3 乾シイタケの1世帯当り年間購入数量と支出金額の推移

年次	数量		金額	
	実数	前年対比	実数	前年対比
1965	159 ^g	76	352 ^円	99
1966	131	82	322	91
1967	129	98	354	110
1968	158	122	416	118
1969	173	109	468	113
1970	185	107	582	124
1971	197	106	698	120
1972	220	112	785	112
1973	239	109	917	117
1974	362	151	1,301	142

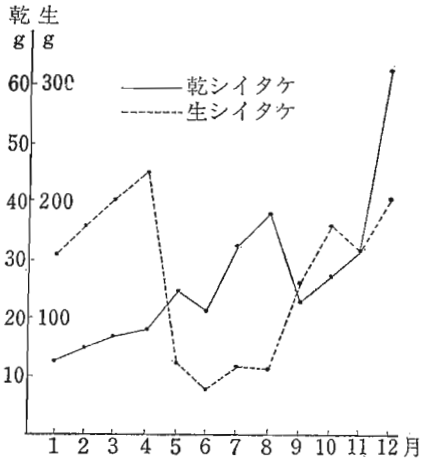
注) 総理府統計局：家計調査年報（各年次）

高度経済成長初期における所得の増加によって、1世帯当りシイタケ消費は1963年（215g）で、顕著な足どりで伸びてきたが、同年をピークに下降しはじめた。しかし、1967年を底にふたたび上昇しはじめており、1974年には数量で362g（前年対比151）、金額で1,301円（前年対比142）と大幅に伸びた。これを1人当り使用数量に換算すると105.8gとなり、1965年2.5倍と飛躍的な上昇である。

一方、消費者価格は図一5のとおり、1963年以降67年まで上昇し、68、69の同年やや安値で停滞するが、



図一5 100g 当りの平均価格の推移



図一六 1世帯当りシイタケの消費量の月別変化

その後はまた上昇に転じ、1974年には100g当り平均価格が399円となり、10年前に比して1.8倍の上昇である。

(2) 需要量の月別変化：つぎに、家庭用シイタケ需要の月別変化をみると図一六のとおりである。この図から家庭でのシイタケの消費は比較的通年的事であることが読みとれるが、しかし、季節的にみると、二つのピークがある。すなわち、第1のピークはお盆の7

月8月に、第2の大きなピークは12月にくる。この12月に需要が多いのは、他の品目と同様一般的現象だが、その数量は正月用消費が見込まれ、年間消費23.7%ときわめて多い。

この月別変化でいまひとつの特徴は、近年夏場の消費が伸びてきている点である。この理由は第1にシイタケの消費が一般化と、通年になってきたこと、第2に生シイタケの生産量が少ない夏場に乾シイタケが多く使用されるようになってきたこと、などである。

(3) 需要の地域特性：まず表一四で、都市階級別特性をみると、都市における需要が多く、町村ではかなり少ない。これは所得の格差あるいは嗜好の差異といったことが原因として指摘されよう。しかし年次別需要の伸長率をみると、小都市B、大都市で低く、中都市、小都市A、町村で高くなっている。

また、消費の地方的特性ではつぎのことが明らかになる。まず、消費のもっとも多いのは東海地方ついで北海道、九州地方となっている。一方需要の少ないのは東北、関東、四国地方となっている。とくに近年のシイタケ需要の地域的特徴は、北海道、東北、北陸などの寒い地方における消費が著しく伸びている反面関東の大都市と中国、四国、九州の主産地における伸びが停滞的な点にある。これは大都市における生シイタケ消費の著しい伸びと深い関係をもつものである。

表一四 シイタケの都市階級別、地域別消費量 (一世帯当り年間購入数量)

区 分		1970年		1973年		73/70
		実 数	指 数	実 数	指 数	伸 長 率
平 均		185g	100	239g	100	29.2
都 市 階 級 別	全 都 市	193	104	247	103	28.0
	大都市 (7大都市)	178	96	222	93	24.7
	中都市 (人口15万以上)	200	108	266	111	33.0
	小都市A(人口5~15万)	186	101	238	100	28.0
	小都市B(人口5万未満)	232	125	268	112	15.5
	町 村	156	84	202	85	29.5
地 域 別	北 海 道	189	102	353	148	86.8
	東 北	106	57	151	63	42.5
	関 東	128	69	160	67	25.0
	北 陸	201	109	274	115	36.3
	東 海	267	144	357	149	33.7
	近 畿	192	104	258	108	34.4
	中 国	190	103	213	89	12.1
	四 国	139	75	153	64	10.1
	九 州	312	169	352	147	12.8

注) 総理府統計局：家計調査報告年報 1970年版 1973年版による。

このほか家庭用シイタケの特性については、全国世帯の収入階層別シイタケ消費の実態をみると、収入の上昇に応じてシイタケの消費は着実に伸びている。また、一般家庭における使用状況についてみると、五目ずし、ませ飯、煮物、中華風料理などの伝統的な料理が多いことなどの特性がみられる。

以上みてきたとおり家庭用シイタケは一時停滞しているが、その後所得水準の上昇と食生活の進展にともない需要が回復し、拡大しつつある。しかし、その消費性向には大きな変化がみられ、これに対応する流通構造、生産構造の再検討が要請されている。

2) 業務用シイタケ

(1) 外食用シイタケの需要：所得水準は年毎に向上してきた結果、食糧消費構造も大きく変化し、外食の支出がふえている。すなわち、「家計調査」によると、1964～1973年の10年間で外食支出は約8.4倍と大きく伸びた。1973年の1世帯当り年間外食費支出は53,841円で、月額にして4,487円となっているが、外食でシイタケを使用しているのは主に「すし、中華食その他和食」であり、この占める割合は31.4%と比較的高い。

業務用シイタケの取引単位は通常 1 kg 袋入りが多い。しかし400～500g 袋入りの場合もあり、それでも家庭用に比べて取引単位は大きい。銘柄は需要先によって異なる。例えば中華料理店向けはほとんどが主体であり、すし屋ではこうしんの中葉が好まれる。これらの選別は主に専門問屋段階でおこなわれる。

(2) 加工用シイタケの需要：シイタケは加工原料

用として広く使われている。その代表として佃煮がよく知られているが、その他罐詰、真空包装を施した各種インスタント食品、粕漬、冷凍食品、せんべいなどの菓子類、まんじゅう、ギョーザ類さらには漢方薬的飲料水の原料などきわめて広範囲に使用されている。したがって、数量的に追求することはきわめて困難である。使用されるシイタケは、一般に落ち物（黒子、ジャミなど）の低価格のものが多い。

このように業務用の需要は、これまで外食の著しい進展によって、顕著な伸びを示してきたが、1975年に入って、その伸び率には低下の傾向がみえ、業務用シイタケに対する経営環境には厳しいものがある。

3. シイタケの輸出

1) 戦後のシイタケ輸出：戦後のシイタケは、その大半が輸出に向けられている関係上、戦後もすぐにシイタケ貿易が再会され、1951年には輸出量1,640トン（輸出比率78%）と早くも戦後のピークまで回復した。しかし、1954年以降は次第に国内需要の増大に伴って輸出比率は次第に低下した。すなわち、これまでの輸出優先型から内需優先型への変化がみられる。その後、1958年に輸出品検査法が制定され、銘柄、品質等の全面的強制検査がおこなわれるようになり、品質は一段と向上した。

しかし、シイタケ輸出はまだまだ不安定な面を多く残している。その第1は、量的に増減がみられ、その振幅がきわめて大きいことである。第2は価格面においても同様の傾向がみられ、しかも内需価格に比して

表一五 シイタケの主要仕向国別輸出量、単価の推移と伸長率

順位	1970年				1974年				伸長率 1974: 1970 倍
	国名	数量	シェア	1kg当り価格	国名	数量	シェア	1kg当り価格	
1	香港	899	54.7	2,716	香港	1,651	62.5	3,594	1.84
2	シンガポール	235	14.3	2,606	シンガポール	487	18.4	3,535	2.07
3	アメリカ	228	13.9	3,188	アメリカ	242	9.2	4,234	1.06
4	マラヤ連邦	59	3.6	2,624	オーストラリア	56	2.1	4,343	2.43
5	タイ	48	2.9	2,700	マレーシアマラヤ	47	1.8	3,471	0.80
6	カナダ	30	1.8	3,249	カナダ	44	1.7	4,272	1.33
7	イギリス	27	1.6	2,636	南ドイツ	31	1.2	3,844	1.94
8	オーストラリア	23	1.4	2,740	イギリス	29	1.1	3,935	1.07
9	西ドイツ	16	1.0	2,616	タイ	14	0.5	3,960	0.29
	その他	78	4.8	2,904	その他	39	1.5	4,083	0.59
	合計	1,643	100.0	3,006	合計	2,640	100.0	3,682	1.61

注) 林野庁林産課：昭和49年特用林産物需給表

相対的に安いことである。これらの原因は基本的には輸出先（仕向国）の需要動向に支配されるが、しかし、国内における生産の不安定性も大きく作用しているのである。

一方、輸出金額は1954年以後、多少の振幅はあるが大幅に増加している。1954年を100とすると1974年には4.3倍に伸びたが、これは単価の上昇にもとづく面が大きい。勿論、生産面では、この間、原木価の高騰、労賃の上昇で生産費が著しく高くなり、その影響も大きい。

2) シイタケの仕向国別輸出品、価格およびその伸長率：シイタケの主要仕向国別輸出品の推移は表一5のとおりである。この表によると、香港向けが6割強で第1位を占め、わが国のシイタケの半分以上が香港へ輸出されている。そして、大きな特色は、このシェアが非常に安定していることである。つぎに、シンガポールとアメリカで27.6%を占めていて、この3カ国が圧倒的に多く、いわば主要な仕向国といえよう。

しかし、近年は海外市場の開拓が活発におこなわれている結果、欧米諸国への輸出も次第に増加してきている。すなわち、1960年の上位10カ国中、欧米はアメリカ、イギリス、西ドイツが加わってきている。過去4年間の輸出品の伸長率を算出してみると、オーストラリア（2.4倍）、シンガポール（2.1倍）、西ドイツ（1.9倍）、香港（1.8倍）などの伸び率が高い。反面、ベトナム、タイ、マレーシアは逆に減少している。しかしながら総体的には、この4年間に1.6倍の伸長率を示している。さらに1974年には史上最高の2,640トン（9,722百万円）の輸出高を記録した。

一方、価格についてみると、アメリカ、カナダ、オーストラリアが平均より常に高く、輸出品のもっとも多い香港は平均価格に似かよっているものの、やや低い。とくに近年著しく伸びてきている西ドイツにおける市場調査の結果をみると、製品に対して「普通」以上の支持を得ているものの、価格面では「高すぎる」が圧倒的に多い。

輸出品の年次別動向はすでに述べたとおり、仕向国の経済情勢と国内における需給関係、とくに生産に相応するが、輸出品の月別変化も生産と同様に二つのピークを読みとることができる。すなわち第1ピークは春5月で、底は2～3月である。夏から12月にかけては1971年を除き、比較的なだらかな中に、11月に第2ピークを迎え、12月に下降する。つまり、輸出品の月別変動も原則的には生産に即していると考えられる。

つぎに銘柄別の輸出品検査実績から年次別の動きをみると、花どんこ、上級のどんこの高級物が減少し、並

級のどんこが増加の傾向にある。この原因は生産面における花どんこ、上級どんこの生産減によるもので、需要面においては、依然として高級物への需要が根強くあるといわれる。

3) 流通経路：先に示した図一1の外需シイタケの流通経路におけるシイタケ専門問屋は、輸出面では選別、荷造り業者の機能、すなわち中継機能の担い手としての役割を果たす。彼らは山成品を買付け、これを乾シイタケ輸出標準規格に選別して、自己のブランドあるいは輸出商社に売り渡す。この経路がもっとも多いが、しかしこうした荷造り業者の手を経ないルートもあり、OSKブランドで有名な大分県シイタケ農協などは直接選別包装荷造りをおこなって輸出商社に売り渡している。

輸出商社は大手商社、中小の専門商社、華僑系商社の3者に大別され40社近くあるが、大手商社のシェアが次第に高まっている。

輸出シイタケの流通機構は国内的にも、また仕向国においても複雑で、このメカニズムの科学的な解明は今後の大きな課題である。とくに海外からの根強い需要に対応する数量の供給および価格の安定化には、まず国内における流通機構の近代化が要請される。

4. 乾シイタケ流通の諸問題と今後の方向

以上、乾シイタケ流通の現状と諸問題を生産サイドから生産——集荷販売——選別・分荷——消費という順序でみてきたわけであるが、ここで今一度乾シイタケ流通上の問題点を整理してみると、つぎの4点に集約できるであろう。

すなわち、その第1は、乾シイタケ業界が近年大きく成長したにも拘らず、旧来の複雑な流通（集荷・販売）機構のまま変化のない型で、市場を動かしている状況であるため、現在各種の矛盾が発生してきていること。またその上、系統間の集荷販売競争の激化、新しい市場開設の動きなども加わって問題をさらに複雑にしている。

第2に、シイタケ価格の変動は著しく投機的な面も依然として残っており、不安定な実情である。

第3に、今日のシイタケの需要は内需優占段階にはいったといわれ、家庭消費の回復を中心に1974年まで順調な伸びを示してきたが、今年にはいって、昨年からの不況と天候不順による生産減が原因となって、その消費の量的な伸びは鈍化しつつある。また、業務用需要についても外食需要の停滞などから厳しい状況にあるといわれている。

第4に、外需（輸出）では、香港、シンガポール、

アメリカを中心に需要は依然として旺盛であるが、しかし、供給サイドの量的、価格面的な面の不定性の解決をせまられていることなどを指摘した。そこで、今後、こうした乾シイタケの流通上の問題点を、ひとつひとつ解決してゆくためには、いかなる方策が考えられるかについてふれる。

(1) 産地規格化にもとづく共同集荷体制の確立と系統市場の育成強化

現在のように生産者団体が単にシイタケを生産者から集めて、パッカーに引き渡す仕事には、現代の流通における意義はきわめて薄いと考えられる。

生産者から集荷した各種のシイタケを生産者団体が産地規格に荒分けすることによって大量かつ短時間に対パッカーとの取引流通がスムーズに行なわれることになり、そこに生産者団体が流通の一端をになう意義のひとつが発生する。

また、系統市場の育成強化を図るためには、主産地乱立する市場を少なくとも県単位で1本化の方向をめざして整理統合し、国や地方自治体が生産者に対して積極的な財政援助をおこなう必要がある。具体的には①系統利用に対する出荷奨励金制度の新設②シイタケ生産振興対策資金の大幅な融資と利子補給の実施などが挙げられる。

(2) 販売方法の改善と価格の安定化

シイタケは豊凶による価格変動がきわめて大きい商品であり、生産者はこれまで一貫して「価格の安定化」を望んできた。しかし、反面ではシイタケ需要は価格が下がったからといって大量に消費されるといった商品ではないことから、常に価格変動のしわ寄せは生産者にかかっている状況である。

そこで、シイタケ価格の安定化には、消費需要に合せて年間の販売計画を立て、それにもとづいた長期的な高値安定価格で販売できる体制を早急に樹立する必要がある。そのためには、①現在の販売方法の改善と②系統出荷率を高め③無条件委託販売の完全実施④長期に鮮度保持できる低温倉庫設備の充実と出荷調整に対する保管料の助成などが必要になってこよう。

また、価格面での新しい対策として注目されるのは、鳥取県が今年から実施を計画している「乾シイタケの価格補償制度」²⁾がある。

注) この制度は、「乾シイタケ価格の时期的不安をりと除き、最低価格補償制度を確立して、安心して生産できるように……」と、シイタケ生産者の長年の願いに答えたものであり、鳥取県と県経済連が乾シイタケ価格安定対策事業として価格補償を50年度から実施することになった。

価格補償の内容は、県経済連が集荷する乾シイタケが1kg当り補償基準価格2,700円を割った場合、その差額を県と県経済連、生産者がそ

れぞれ3分1ずつ補てんするもので、補償される最低価格は1kg当り1,590円、補償基準価格とは、過去7年間の県産シイタケの市場平均価格から50年度のすう勢値価格を算出し、その85%をあてたもので、いわば生産原価に相当する価格である。対象となる補償数量は、系統による共同選別事業の芥子分の40トン、価格の比較安定した、しかも量的にも少ない秋子については対象から外されている。総事業費4,440万円である。

この価格補償制度は、生産者の強い要望から生まれたもので、生産者保護策として評価できるし、またシイタケ事業を通して山村振興をはかるうえで刺戟剤として期待される。

しかし、この価格補償制度は内容的にみて補償基準価格の算出方式や補償数量などに不十分な点がみられ、現在のところ生産者の精神的安定剂的な役割しか果たし得ないと考えられるが、今後国や地方自治体、生産者団体等が加わって検討されれば、その内容は一段と充実すると思われる。

(3) 国内市場におけるPRの徹底

シイタケの国内消費は安定的に伸びていて400億円(取引高)のボリュームに成長した。

シイタケは売価の上昇とともに嗜好の変化から肉厚ものが消費者の味覚をとらえつつあり、今後この傾向は続くであろう。しかし、その反面では、シイタケ小売の場合、重量や栄養価等の内容表示が少なく、店頭をはじめとする各種のPRが不十分であるなど、改善されなければならない課題も多い。今後は生産者団体をはじめシイタケに関係するあらゆる階層の者が一致して積極的な消費宣伝活動も欠せない課題である。

(4) 輸出窓口の一本化と海外市場開拓の継続的実施
外需については、まず海外における適正かつ安定した取引きと、その拡大を図るためには、輸出窓口の一本化による価格の安定化の推進とどこを主体とする上質シイタケの安定的な供給体制の確立が肝要である。勿論、今後も新しい市場開拓のための各種のPRの必要なことはいうまでもない。

参 考 文 献

1. 日本貿易振興会：米国および西独における乾シイタケと缶詰シイタケの市場調査 1965年
2. 日本貿易振興会：英国における日本乾シイタケの市場調査 1972年
3. 宮本武史：シイタケ流通の現状をさぐる、きのこ 1972年 2月号～9月号
4. 塩谷勉、吉良今朝芳：大分県におけるシイタケ生産の経済的研究 1973年
5. 吉良今朝芳：シイタケの生産と流通 1974年